

和泉式部日記「故宮の御はてまでは」考——応永本文の可能性——

菅原 領子

はじめに

和泉式部日記は現在三条西家本の本文によつて読まれるのが一般的であり、作品の読みに関する研究も専らこの本文によつて進められている。しかし、現存伝本中最善本とされる三条西家本であっても、その本文が十全ではないことは言うまでもない。明らかに誤脱を犯していると思われる箇所もあるが、その場合も、必ずしも他系統本文によつて補われて読まれているとは限らないようである^(一)。したがつて、作品についての理解は大勢ではやはり三条西家本に基づいて行われており、他系統本文は必ずしもそこに反映されているとは言えないように見受けられる。伝本や個々の本文異同についての研究も進められている^(二)のだが、その成果が作品の読みの深化にはあまり生かされていない^(三)というのが現状ではあるまいか。一読して明らかにおかしいと気づかれるような大きな誤脱でなくとも、作品の読みに関わつてくるような異同があれば、それぞれの

本文についてその妥当性を検討してみる手続きは必要であろう。小論では、細かい問題ではあるがそういった箇所の一つについて、三条西家本文と応永本文との比較を行い、併せてそこから導かれる推論を提示してみたいと思う。

一

今回問題として採り上げたのは、次の箇所である。まず、三条西家本によつて本文を掲げる。

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ
今日のタぐれ

御覧じて、げにいとほしうもおぼせど、かゝる御歩きさらにせさせ給はず。北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出でんもあやしとおぼしめすべし、故宮のはてまでそしられさせ給ひしも、これによりてぞかし、とおぼしつゝむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。(一九頁)^(四)

初めての逢瀬の翌日、おいでを待つとの思いを訴えた女からの歌に、宮が女への思いはありながらも、訪ねてゆくことを逡巡する場面である。女の訴えに対して「げにいとほしうも」とは思うのだが、軽々しい忍び歩きはしにくい身分であるし、北の方の思惑もある。そしてまた、とうとう一つ自製の根柢が挙がっている。この最後の部分を直訳的に口語訳すれば、次のようになる。へ亡き兄宮が最期まで非難をお受けになられたのも、この女によってであつたよ、と思い慎まれるのも、（女のことを）濃やかに愛しいとはお思いにならぬのであるらしい。へ

表面的な事実だけを取り上げれば、初めて女に通つた翌日に早くも途絶えを置いてしまう、宮の心中である。語り手は尤もなその理由を並べてみせる。そして、そんなふうには慎まれるのも、（まだ）それほど女への御愛情が深くはないのだろう、と、女をも宮をも多少突き放した言い方をする。

では、同じ部分を応永本によってみるとどうであろうか。

故宮の御はてまではないたうそしられじとつゝむもいとねんごろに覚さぬにぞ。^(五)

明らかに、宮が女を訪れることを慎む理由が異なってくる。

へ亡き兄宮の御一周忌までは、ひどく非難されまいと慎むのも、（女のことを）大して濃やかに愛しいと思われぬのだろう。へ

三条西家本の本文では、この女ゆえに兄宮が非難を受けた事を帥宮が思い起こし、自分はそうはなるまいと自制しているのに対して、応永本文では、（せめて）兄宮の一周忌が済むまでは、世間から非難されるような行動は慎もうと考えていることになる。三条西家本では「そしられさせ給ひし」と、故宮に対する敬語が重すぎ^(六)、応永本文には「つゝむ」と宮の行為が無敬語であるという問題はあるが、概ねどちらも意味の通る本文になっている。では、どちらがより本来的な本文と考えられるであろうか。その手掛かりとして、「はて」「御はて」という語について検討してみた。

「はて」の最も基本となる語義は、〈物事の終わり、最後〉である。そこから、前掲の三条西家本本文の「はて」も生涯の最後、つまり〈最期、臨終のとき〉というふうに使われているわけであるが、平安朝における「はて」の用例を見ると、ある程度固定した使われ方のあることがうかがわれる。すなわち、次のような意味での用いられ方である。

①五節・法華八講等の行事或いは参籠等、日数を限られた期間の最後、また時刻、春夏秋冬の季節や一年の終

わり

② いちばん端、また、遠い彼方としての、海や空の「はて」

③ 人の生涯の最後、すなわち最期、また、末路

④ 四十九日（忌の終わり） または一周忌（喪の終わり）
それぞれについて、多少例を挙げておこう。^⑤

① 「藤壺中宮出家」（「法華八講の」）はての日、わが御事を結願にて、世を背き給よし仏に申させ給に、みな人々おどろき給ぬ。（源氏物語・賢木）

左兵衛督高遠賀茂に七日詣でける果ての夢に、御社よりとてちはや着たるをうなの文を持てまで来たりけるを……（拾遺集五八八詞書）

〔唐崎へ向かう途中〕ふりがたくあはれと見つゝ行きすぎて、山口にいたりかゝれば、申のはてばかりになりたり。（蜻蛉日記・中）

〔薄は〕秋のはてぞ、いと見どころなき。（枕草子・草の花は）

物言ひ侍ける女に、年の果の頃ほひ、つかはしける（後撰集一〇七四詞書）

② なにゝかはたとへていはむ海のはて雲のよそにて思ふ思は（浜松中納言物語・二）

③ かく、人にことならんと思ひこのめる人は……そのあ

だになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らん。（紫式部日記）

④ 太政大臣の北の方うせたまひて、御はての月になりて、御わざのことなどいそがせ給（ふ）ころ……（大和物語・九十七段）

以上の分類に入らない場合は単純に（へ終わり、最後、しまい）等と訳せるものが殆どである。「はて」の語自体は用例にさほど問題のあるものではない。

これらの用法のうち、当該箇所解釈に関わってくるのは、③と④の用法である。三条西家本本文では③、応永本本文では④の意味に解せるわけであるが、さらに③の用法を検討してみると、故宮——帥宮にとつての亡き兄宮・弾正宮の最期の意で「はて」を使うことが妥当かどうか、不審が出てくる。なれのはて、という言葉が示すように、人生の最後、人の境遇の行き着いたところを「はて」という言葉で表すとき、よい意味では使わないのが普通だからである。右で③の例に挙げた紫式部日記の一節は、いわゆる消息文の中で清少納言に言及した有名な部分であるが、このことを象徴的に表している。さらに用例を挙げておく。

Aはかなしや我が身のはてよあさみどりのべにたなびく霞と思へば（小町集（小相公本）・一一五）

B いたづらにおいにけるかなたかさこのまつやわが身のはてをかたらん（貫之集・一九九）

C 「蛇の夢の記述の後」これもあしよしも知らねど、かくしるしをくやうは、かゝる身の果てを見聞かん人、夢をも仏をも用いるべしや用ゐるまじやと、定めよとなり。（蜻蛉日記・中）

D ときはなるたけのみどりもかぎりあればわがみのはてはいつそとのみぞ（大式高遠集・五六）

E 世の中をかくいひいひて身のはてはいかにやいかに成らんとすらん（宝物集・二）（△）

F 命だにあらばみるべき身のはてをしをばん人もなきぞ悲しき（和泉式部集・二九〇）

G とてもかくかくてもよそになく身のはてはいかがはならむとすらん（同・五九一）

H 「薫、我が身の出生について悩む」おぼつかな誰に問はまじしいかにしてはじめもはても知らぬ我身ぞ（源氏物語・匂宮）

I 「薫、亡き大君が、中君を自分に託したがっていたことを回想」はらからといふ中にも、限りなく思ひかはし給へりし物を、いまはとなり給にしはてにも、とまらん人をおなじ事と思へとて、……（同・宿木）

J 「少将、浮舟が継子と知り、不満」「……品あてに艶ならん女を願はば、やすく得つべし。されど、さびし

う事うちあはぬみやび好める人のはてくは、ものきよくもなし。……」（同・東屋）

K かぞふればとしのをはりににけりわが身のはてぞいとどかなしき（相模集・五六二）

L おもひかねつれなきひとのはて見むとあはれいのちのをしくもあるかな（後三条院四宮侍所歌合・一一・なかざね）

M 恋死なむいのちはことの数ならでつれなき人のはてそゆかしき（後拾遺集・恋一・六五七・永成法師）

N つれなきのためしは誰ぞたれにても人なげかせてはてはよしやは（内大臣家歌合元永元年・五六・師俊朝臣）

O みな人のはてはよもぎふこけの下さかえしやどはいづくなるらん（教長集・九四二）

P ふるとしはこよひばかりになりにつれわがみのはてもいつとしらばや（六条院宣旨集・六九）

Q あさゆふにかかる露じもむすびおきてこの身のはてはいかがなるべき（唯心房集・二九）

R いかでかは世にながらへてわびつつはつれなきひとのはてをだにみん（久安百首・三六六・左京大夫顕輔）
S つひとしたたれかははてのなかるべきおくれさきだつ程ばかりこそ（同・六九一・尾張守親隆朝臣）

T ……ただ一すちに君をのみたのむ心になぐさみてをしからざりし身のはてもゆかしかりけり……（同・一二

九九・待賢門院安芸

Uしるしらぬよにある人のはてみればただひとときのけ
ぶりなりけり（統詞花集・哀傷・四一一・高階経章朝
臣）

Vおぼつかないかになる身のはてならむ行くえも知らぬ
旅のかなしき（千載集・羈旅・五二八・前中納言師仲）

W恋ひ死なむ命をたれに譲りをきてつれなき人のはてを
見せまし（同・恋二・七二二・俊恵法師）

X恋ひしなむわが身のはてを思ふにも草葉の露をあはれ
とぞみる（公衡集・七六）

Yおもひきやあるにもあらぬ身のはてにきみなきのちの
ゆめをみむとは（長秋草・一五二）

以上（先に③の例として挙げた紫式部日記の用例と併せて）
が平安時代の物語・日記・歌集^⑤から検し得た、人の命
の終わり、人生の末路の意を表す「はて」の全用例である。
誰の最期・末路を指しているかについてこれらを整理する
と、I自分自身（A、H、K、P、Q、T、V、X、Y）、
II自分以外の特定の或る人（I、L、N、R、W）、III一
般論としての、人間というもの（J、O、S、U）、に分
類できる。このうち、Iは全二十六例中十五例とおそそ六
割を占める。「我が身の果て」「この身の果て」等とある
から、自分の〈最期・末路〉の意であることは明白である。

次にIIであるが、これは六例数えられ、そのうち五例まで
が「つれなき人（あるいは誰か「つれなさのためし」とな
る人）のはて」として歌に詠まれており、これらは後拾遺
集の六五七歌（M）を踏まえた表現であろうから^⑥、そ
れぞれ別個に独立した用例と考えず、一つにまとめて数え
るべきであろう。残る一例は、源氏物語宿木巻の用例であ
る。亡き宇治の大君が、いまはの 際まで妹中君と薫との結
婚を望んでいたことを薫が思い返し、後悔する場面で、大
君の最期について「いまはとなり給にしはて」という言い
方がされている。IIIは人の命のはかなさを言うのに用いら
れ、あるいは「さびしう事うちあはぬみやび好める人のは
てく」という言い方で（そういうった人の末路は……）と一
般論が述べられる。先に挙げた紫式部日記の消息文中の例
も、清少納言を指してはいるものの、建前としてはこの用
法のうちに入ると言えようか。

以上検討してみてわかることは、〈最期・末路〉として
の「はて」の語は、一般論でなければ自分自身について用
いられるのが普通であるということである。その自分自身
も、「いたづらにおいにける」「をしからざりし」「あるに
もあらぬ」といった、卑下や謙遜の意識を伴う我が身であ
ることが多い。また先にIIに分類した用例のうち五例は、
〈慕わしい、しかし私に対して冷淡なあの人、そんなふう
に他人の切なる恋心をすげなく扱う人は、先へいつてきつ

と報いがあるでしょうよ」との含みで、想う相手の行く末について、本来は相応しくないはずの「はて」の語を、いわば逆説的に用いていると考えられる。こういった否定的な意味合いを持たない〈生涯の終わり・最期〉としては、Ⅲ人の命のはかなさを詠んだ〇、S、Uと、Ⅱ源氏物語宿木巻の用例^{二二}だけが例外となるが、他の「はて」はすべて、辞書的に説明すれば、「人の境遇の行き着いた所。普通悪くなった場合にいう。なれの果て。」^{二三}ということになると言えよう。

とすれば、「故宮のはてまでせしられさせ給ひしも……」という「はて」の用法は、帥宮の心中語としても、また作者^{二四}の意識の反映としても、不適當であると言えそうである。帥宮にとっては亡き兄宮、作者にとってはかつての恋人であり、また身分も自分より遙かに高い相手である。そのような目上の人や家族、愛する者に対して、その最期を言うのに「はて」は穏やかでないと言えよう。

では、応永本に言うところの「御はて」、つまり〈一周忌〉の意の用法はどうか、と見ると、これに関しては枚挙に暇がない。特に、「御はて」と「御」が付く場合は、ほぼすべて〈忌み明け〉または〈一周忌〉の意を表す^{二五}。

歌では、この〈忌み明け・一周忌〉の「はて」と〈限り〉の「はて」を掛詞として、〈忌み明け（または一周忌）となったが、亡き人を慕う悲しみや涙には限りというものが

ない〉といった詠み方をされることも多い。

限あれば今日脱ぎ捨てつ藤衣果なき物は涙なりけり
（拾遺集・哀傷・一二九三・恒徳公の服脱ぎ侍とて・
藤原道信朝臣）

のような例である。また、「はての事」「はてのわざ」という熟語で使用される例も多い。

〔作者の母の一周忌〕年かへりて春夏もすぎぬれば、
いまは果てのことすとて、こたびばかりはかのありし
山寺にてぞする。（蜻蛉日記・上巻）

〔紀伊守、浮舟の法要について語る〕「……その御お
とうと、又忍て据へたてまつり給へりけるを、こそ
の春、又亡せ給にければ、その御はてのわざせさせ給は
んこと、かの寺の律師になん、さるべきことの給はせ
て……」（源氏物語・手習）

用例を挙げることは省略するが、単に「はて」「御はて」だけで〈忌み明け・一周忌〉を言う場合も多くあることは前述の通りである。

今回平安時代の物語・日記・歌集を対象に調査した結果、「はて」の用例全体から見ても、この〈忌み明け・一

周忌」を意味する用例の比重の重いことがわかった。これに比べると、〈最期・末路〉の意の用例は圧倒的に少ないと言える。数値を示せば、「はて」の全用例二九七例中、〈最期・末路〉の意は先に挙げた通り二六例で、全体の一割に満たない。一方、〈忌み明け・一周忌〉の意の「はて」は七三例と、約四分の一を占めるのである。

そして、〈最期・末路〉の意で「はて」を用いるにしても、自分または「つれなき人」の最期について言うのが普通であり、帥宮の心中で亡き兄宮の最期を指して言うような使い方は相応しくないと考えられることも、前述した通りである。これとは逆に、亡き兄宮、故宮の〈一周忌〉の意で「御はて」と言うのであれば何ら問題はなく、「はて」の語の最も一般的な用法の一つであると言える。つまり、応永本系統の本文は、三条西家本に比して「はて」の語の用法としてはるかに自然なのである。

系統論^{二五}からは三条西家本・応永本いずれの本文が優勢であるか判断し難いが、以上の考察からは当該箇所の違いについて、応永本本文が「はて」の語の用法において勝っていると言えないであろうか。

二

以上、「はて」の語の用法に照らして、三条西家本より

も応永本本文の方が妥当と考えられることを述べてきたのであるが、では、三条西家本本文が本来的なものではなく後に生じた異文であるとして、このような形が生じた所以はどのあたりに求められるであろうか。

和泉式部と弾正宮為尊親王との恋愛に関して疑問を提出されたのは藤岡忠美氏^{二六}であるが、その当否を措くとしても、二人の仲を明確に示すような文献上の徴証が極めて少ないことはこの御論によって改めて確認されたところである。和泉式部日記の他には、栄花物語巻七「とりべ野」、巻八「はつはな」と、弾正宮為尊親王を悼む意の詞書を付されて勅撰集に入集している和泉式部の哀傷歌が挙げられるに過ぎない。

三条西家本・応永本、いずれの本文を採っても、女に対する帥宮の愛情が、この段階では「ねんごろ」なものとは言えない、さほど深いとは言えない程度のものである、という点には変わりはない。しかし、女の人物造形に関しては事情が違ってくる。日記冒頭で女は故宮とのはかなく終わった仲を追懐し嘆きのうちに日々を送っていることが語られるが、三条西家本によればその「夢よりもはかなき世の中」は世間の非難の対象となるような仲であったことになる。その理由としては、無論二人の身分違いということがまず挙げられるであろうが、後に侍従の乳母の口を通して明かされる^{二七}ように、女の多情の噂も関与しているの

かもしれない。少なくとも、三条西家本の「故宮のはてまでせしられさせ給ひしも、これによりてぞかし」という本文は、後の「そが中にも、人々あまた来通ふ所なり」(二九頁)という侍従の乳母のせりふへとつながっていく内容を持つ。

これに対し、応永本系統の「故宮の御はてまではいとうそしられじ」という本文は、まず忍び歩きの許されぬ帥宮の身分と北の方の思惑をばばかる気持ちとを述べ、だからこういった非難の対象となりかねない、女のもとへの忍び歩きという行為は兄宮の一周忌が済まぬうちは控えよう、ということ、直前の部分と素直につながっている。また、「そしられ」る原因は女の側にあるのではなく、兄宮の一周忌も済まぬうちにその兄宮の情人であった女のもとへ、自分の身分や北の方の存在をも顧みず通おうとする帥宮の側にあることになる。もっと簡単に言えば、三条西家本文では故宮が「そしられ」たのは端的に女のせいであり、^二 応永本系統本文では帥宮が「そしられ」かねないのは忍び歩きという帥宮の行為の方に原因があることになるのである。

本作品に描かれている帥宮と女との恋愛は、故宮の存在なくしては始まらないであろうが、しかしその故宮の存在は言わば影のようなものであり、決して前面には出てこない。言うまでもなく主題は帥宮と女との恋にあり、作品の

中で、故宮が表立って言及される箇所は初めの方だけで、ごく限られている。「夢よりもはかなき世の中」と冒頭で言い、女が心中に「故宮のさばかりのたまはせしものを」(一八頁)と呟くのが、女と故宮との交際について多少とも具体的にふれた数少ない箇所である。

女についての多情の噂を、侍従の乳母等帥宮の周囲の人々の口を借りて語らせながらも、女の側からは一貫してそれらを斥けるのが本日記作者の姿勢である。その作者が亡き宮との恋愛、「遠ざかる昔」について、それが世間の指弾の的であった、この女ゆえに非難されつつ宮は亡くなった、と記すであろうか。ここは応永本本文が本来の形であり、三条西家本文にはむしろ、栄花物語「とりべ野」の記述が影響を与えているように思われるのである。「とりべ野」では、弾正宮の死の前後について次のように語られる。

弾正宮うちはへ御夜歩きの恐ろしさを、世の人安からずあいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる、今年は大方いと騒しう、いつぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過しつゝあさましかりつる御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせ給て、うせ給ぬ。この程は新中納言・和泉式部などにおぼしつきて、あさましきまでおはしつる御心ばへを、憂き物

におぼしつれど、うへはあはれにおぼし歎きて、四十
九日の程に尼になり給ぬ。もとよりいみじう道心おは
して、二三千部の経読みて過ぎせ給へれば、世のはか
なさもおぼし知られて、いとゞしき御行なり^{二七}。

『権記』によれば為尊親王の死は腫物を患つたためであり、
疫病流行のさなか人々の諫めも聞かず夜歩きを繰り返した
揚げ句に罹患して亡くなったかのような栄花物語の記述に
は疑問が持たれる^{二八}のであるが、そのひと続きの文脈に
おいて為尊親王と和泉式部との仲が語られている。そして、
親王薨後出家して行い澄ました宮の北の方との対比で、親
王の好色な態度が強調される形となっている。ここに語ら
れている為尊親王の態度は、まさしく「はてまでそしられ
させ給」ようなものである。逆に言えば、親王と和泉式
部の恋愛関係に対する世間の非難のあつたことは、「とり
べ野」のこの箇所と三条西家本を除けば他には見られない
のである。和泉式部日記に、故宮即ち為尊親王と女との仲
が世間の非難の対象であつたことがわざわざ記される必然
性が乏しいとすれば、むしろ三条西家本の当該部分本文は、
栄花物語「とりべ野」の記述の影響を受けていると考えら
れないであらうか。

三

応永本文を採るとして、では、帥宮は実際「故宮の御
はてまではいたうそしられじ」と憤んでいるのか。これに
ついては、「故宮の御はて」つまり一周忌について日記自
体に何の記述もなく、それがいつの間に過ぎていくのかさ
えわからないため、はっきりしたことは言えない。日記に
は「四月十余日（応永本では「四月」）（四月）晦の日」
「五月五日」と、所々に大体の日付が記される^{二九}のであ
るが、六月の日付は全く欠いており、「五月五日」以降、
次に明確な日次が示されるのは、「かくいふほどに、七月
にもなりぬ。七日、……」と、七月七日まで待たねばなら
ない。六月十三日の故宮の一周忌がこの間の記事のどのあ
たりで過ぎていくのかは推測するより他ないのだが、吉田
幸一氏^{三〇}はこれを、「からうじておはしまして、『あさ
ましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを……』（三
〇頁）に始まる二人の同車行の記事の直前に位置づけてお
られる。日記の記述と月齢や天候等の史実とから導き出さ
れたこの推論の蓋然性は高いと考えられるが、そうなると、
問題の箇所からこの一周忌の翌日まで、宮と女は一度も逢
瀬を持つていないことになる。女が精進中であつたり、宮
の訪れに気づかなかつたり、あるいは宮が人々や侍従の乳
母に諫止されたりと、消息のやり取りはあるものの、二人
の関係はなかなか進展しないのである。が、この日一転し

て「まめやかに御物語し給ひて」、女を車に「たゞ乗せに
乗せ給」い、翌日も続けて女を連れ出す宮の積極性は、直
前に兄宮の一周忌を済ませたことが与かっているのではあ
るまいか。

六月十三日に横川慧心院にて帥宮も参会して為尊親王の
一周忌法会が行われた^{三三三}ことは史実として確かである。
その故宮の一周忌にふれないばかりか、忌み月にあたる六
月の日付そのものを欠いているということが、意識的にな
されたものか無意識のものか、うかがい知ることはできな
いが、当該箇所が故宮の一周忌を意識した文言になってい
るか否かは、この辺りの読みにも関わってくるのである。

「待たましも」の歌を受け取っても結局宮は暗くなつて
から返歌しただけで、再度の女の返歌にもそのまま数日音
沙汰がなかった。その後も宮は二度ほど「忍びて」女を訪
れるものの逢瀬はなく、件の同車行の日まで、宮の態度は
概ね「今宵もおはしまさまほしけれど、かゝる御歩きを人
々も制し聞ゆるうちに、内大殿、春宮などの聞しめさんこ
ともかるくしう、おぼしつゝむほどに、いとはるかなり」
(二四頁)といった消極的なものである。もとより、同車
行の日以降も、二人の仲が順調に進展するわけではなく、
宮は幾度も女に隔てを置くが、しかしその理由は、この日
までに見られた「つゝまし」と思う気持ちや「おぼしつゝ
む」といった態度からではない。女に他の男が通ってきて

いるという疑惑のせいである。宮が女のもとへ通うことに
対して周囲の人々や世間の口は相変わらずうるさいはずな
のだが^{三四}、少なくともそれが理由で宮が女を訪なうこと
を慎んだ、という記述はない。しきりに周囲への聞こえを
気にしていた宮が、突然二日続きで女を連れ出し、帰りが
けには「かやうならむ折は、かならず」(三三頁)とまで
約束をとりつけようとする。女との最も人聞きの穏やかな
つき合い方は、乳母も言うように女を召人にしてしまうこ
とだが、ここで宮が女を自邸へ伴うのはそういった行為で
はない。剩え、宮自らが女を迎えにきている。この突然の
積極的な態度を、女との交渉の当初において宮が「故宮の
御はてまではいたうそしられじ」と慎んだ、という応永本
系統本文という対応させて考えたいと思うのである。

おわりに

以上、不充分ながら当該箇所の応永本系統本文を妥当で
あると考えることの可能性について述べたつもりである。
複数の本文が存在する場合、何を以て一方を是とし一方
を非とするかの基準は自明ではなく、そこに恣意が介入す
る恐れがあることは言うまでもない。この点については慎
重であらねばならないが、さほど伝本・系統の数が多くな
く、それらの整理も先学によって進められている本作品に

おいては、三条西家本のみによるのではなく、他系統本文をも視野に入れた読みが、より進められてよいのではあるまいか。このように考え、その一端を提示したく、蕪稿を草した次第である。大方の御批判を請いたい。

〈注〉

- (一) 例えば岩波文庫本で三五頁になる、「人々々々に住む所なりければ、そなたに來たりける人の車を、車侍り、人の來たりけるにこそ、とおぼしめす。」という箇所は、応永本では「そなたに」以降、「人のきたりける車を御覽して人の侍にこそくるま侍りときこゆればよし帰なんとておはしましぬ人のいふはまことにこそとおぼすも」という本文になっている(寛元本もほぼ同じ)。「御覽して」が宮の行為、続く「きこゆれば」が従者の行為というわかりにくさはあるが、三条西家本のままでは帥宮の心中語として「侍り」がどうしても落ち着かない。三条西家本と応永本の異同ではいわゆる「入れ句」の問題などがあつてこも少し複雑だが、「にこそ」が近接して出てくるための目移りによる三条西家本の脱落と考えるのが妥当であろう。しかし現在刊行されている主要な注釈書で三条西家本を底本とするものにこの応永本文を採用しているものはなく、新潮古典集成の頭注でふれられているのみである。
- (二) 吉田幸一『和泉式部全集 本文篇・資料篇』(古典文庫、昭和三四年・昭和四一年)、伊藤博『和泉式部日記伝本攷』(桜

楓社、昭和五六年) 大橋清秀『和泉式部日記本文の研究』(和泉書院、一九九一年)、伊藤鉄也編『四本対照和泉式部日記―校異と語彙索引―』(古代中世文学資料研究叢書3)(和泉書院、一九九一年)、金井利浩『和泉式部日記応永本系統本文整定の試み(上)(中)(下)』(『中央大学大学院研究年報』第一九号、『中央大学国文』三三三号、『中央大学大学院研究年報』第二〇号)、他。

(三) 森田兼吉『和泉式部日記』三系統本論再説(國學院大学院友学術振興会『新国学の諸相』おふう、平成八年)、同『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない―『和泉式部日記』三系統論再読・続稿―(梅光女学院大学日本文学会『日本文学研究』第三一号)。

(四) 以下、三条西家本和泉式部日記本文は清水文雄校注『和泉式部日記』(岩波文庫)によって掲げ、頁数を記す。

(五) 応永本本文は、宮内庁書陵部蔵『和泉式部物語』(影印本シリーズ)(新典社、昭和四三年)によって掲げ、吉田幸一『和泉式部全集 本文篇』(前掲)により当該箇所を漢字・仮名の差異以外に異同のないことを確認した。なお、寛元本の当該箇所については誤写があると考えられる(小松登美全訳注『和泉式部日記(上)』(講談社学術文庫)(講談社、一九八〇年)二〇八頁)ので、考察の対象としなかった。

(六) 小松登美全訳注『和泉式部日記(上)』(前掲)二〇八頁。

(七) 以下、引用本文はそれぞれ、

大和物語・落窪物語・浜松中納言物語・枕草子

…岩波日本古典文学大系

源氏物語・蜻蛉日記・紫式部日記・八代集

…新岩波日本古典文学大系

八代集以外の歌集・宝物集歌本文

…新編国歌大観

による。

(八) この歌、拾遺集五〇七・一三一四には「世の中をかくいひいひのはてはてはいかにやいかならむとすらん」として出ている。

(九) ここに引用した作品以外で「はて」の語の検索の対象としたのは、伊勢物語・平中物語・竹取物語・うつほ物語・落窪物語・多武峰少将物語・狭衣物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・堤中納言物語・栄花物語・簗物語・土佐日記・更級日記である(用例の見あたらなかったものも含む)。なお遺漏もあるが、大勢として結果を出し得たものと思う。なお、「はてなし」「はては(はてくは)」の用例は、「はて」の独立性が薄いと考え、考察の対象外とした。

(一〇) あるいはⅠの歌の方が先行するかも知れないが、いま、明らかにし得ない。

(一一) 「身のはて」等となく、状況としても当該箇所似ているが、同様の例が他に見出されない。いま、例外として措いておく。

(一二) 角川書店『古語大辞典』「はて」の項⑥による。

(一三) 本日記作者については、和泉式部の自作であることが今日ほぼ承認されているものと考ええる。

(一四) うつほ物語「楼上・下」に、「このは、わかくよりみやつかへをつかうまつりし、身のほどのあやしきをもしらず、こどの、御はての世までさぶらひて……」とあるのは、四十九日や一周忌ではなく(御晩年の時代)とても訳せようか。「の世」と続き、「最期」というよりは「はてつかた」などというときの「はて」、終わりの方、という意味合いと見て、Ⅱの例に含めなかった(同様に考えて、「落窪君の父中納言の言」……又かく死ぬれば、我(が)身大納言になるまじき報にてこそ有(り)けれど、これのみぞあかずおぼゆる事。さては老のはて、死のはてのおもだくしきは、おのれにまさる人よもあらじ」(落窪物語・巻四)、「いかでいやしからざらん人のをんなご一人とりて、うしろみもせん、一人ある人をもうちかたらひて、わがいのちのはてにもあらせんと、この月ごろおもひたちて、これかれにもいひあはすれば、……」(蜻蛉日記・下)もⅡの例に含めていない)。なお、七三例に対してただ一例、「御」がついて〈忌み明け・一周忌〉を意味しない例外というだけで、不審は残る。

(一五) 森田兼吉『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない『和泉式部日記』三系統論再読・続稿―(前掲)、他。

(一六) 藤岡忠美「和泉式部伝の修正―為尊親王をめぐって―」

『文学』四四卷一一号)

(二七)「侍従の乳母参上りて、『出でさせ給ふはいづちぞ。このこと人々申すなるは。なにのやうごとなき際にもあらず。

使はせ給はんとおぼしめさん限りは、召してこそ使はせ給はめ。かるくしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そが中にも、人々あまた来通ふ所なり。便なきことも出でまうで来なん。すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがしがしはじむることなり。故宮をも、これこそめて歩きたてまつりしか。夜夜中と歩かせ給ひては、よきことやはある。……』(二八～二九頁)

(一八)「これによりてぞかし」の「これ」をへ女との(こういつた)関係」と解することでもきようが、やはり直接に(この女)と指していると読む方が自然であろう。

(一九)栄花物語の引用は、松村博司・山中裕校注『栄花物語』(岩波日本古典文学大系)による。

(二〇)同上書、頭注。

(二一)この日付自体も日記内部で、あるいは史実に照らして矛盾を来していることが指摘されているが、ともかく作者の意識に上った特定の日次であるということとはできよう。

(二二)吉田幸一『和泉式部研究 一』第六章(古典文庫、昭和三九年)

(二三)同上。

(二四)後に、宮の言葉に「世の中の人も便なげにいふなり。

時々参ればにや、みゆる事もなけれど、それも人のいと聞きにくくいふに……」(六一頁)とある。

(すがわら りようこ・博士後期課程)